



©JGTO

歳を重ねるほどに 勝利や成功の喜びは 大きくなっていく。

尾崎 直道プロ 1956年5月18日生まれ、徳島県出身。デビューから8年後の1984年に初優勝し、同年は3勝をあげて賞金ランキング2位。1991年はシーズン4勝で初の賞金王を獲得した。1993年は米ツアーのシード権を獲得し、2001年までプレー。その間は日本ツアーでも活躍し、1997年は通算25勝に到達して永久シード獲得。1999年には2度目の賞金王に輝いた。50歳になった2006年からは米シニアツアーに参戦する一方、2012年には国内シニアツアーで賞金王を獲得している。ツアー通算32勝。

——1993年頃は、米ツアーに本格的に挑戦する選手はほとんどいませんでした。日米の差をどう感じましたか。

私は日本で賞金王、永久シードを獲得して、客観的にみても日本ではトップクラスの力がありました。しかし、アメリカではシード権をとるのが精一杯で優勝はできませんでしたから、ツアーのレベルの差を痛感させられました。

——プレースタイルの違いもあつたのでしょうか。

日本人はミスをしたくないように手堅くゴルフをするのですが、アメリカ人は最終日の優勝争いでも守りに入らずに攻め続けるんです。プレッシャーがかかる状況になるほど力を出せる選手が多かったですね。

——当時と今を比べて、日米の差は縮まったと思いますか。

石川遼選手と松山英樹選手、とくに松山選手は米ツアーでも優勝して結果を残していますし、これからも活躍してくれると期待しています。あの2人のおかげで、日本と世界の距離は近くなったような気がします。

ただ、選手層の厚さを考えると、レベルはそれほど埋まっていないかもしれませんね。

——日本の男子ツアーについては、昔と今の違いはありますか。

1つはファンがプロを見る目が変わりましたね。昔はプロのプレーを見るだけでファンは満

足りてくれましたが、今は違います。ファンを意識してプレーしたり、ファンサービスをしなれば人気を獲得できません。

また時代の流れかもしれませんが、せんが、プレー中に喜怒哀楽を見せる選手が少なくなりましたね。だから選手がおとなしく見えて、「個性がない」と思われている気がします。例えば、プレー後のインタビューで感情をもっと表に出すなどのアピールが必要かもしれません。

——国内のプロ選手についてはどうですか。

石川選手や松山選手のようなスター選手がもって現れてほしいですね。ツアー活性化のためには若手選手の台頭が不

可欠です。あの2人もアマ時代からプロの世界を賑わせていましたが、そんなスター性のある選手の登場を望んでいます。

ゴルフがオリンピックの正式種目になったことが1つのきっかけになればいいですね。オリンピックを見てゴルフに興味をもつ子どもたちが増えてくれることを期待しています。

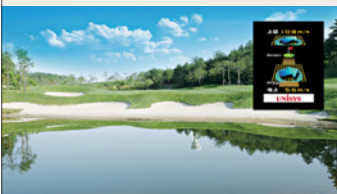
——最後に今後のゴルフの目標をお聞かせください。

日本のシニアツアーに参戦しつつ、少しはレギュラーツアーにも出ていきたいです。優勝をめざすとは言いませんが、今でも優勝争いをしたい気持ちはあります。今年で59歳になりますが、歳を重ねるほど勝利や成功の喜びは大きくなっていきます。今やゴルフは人生の一番の楽しみなんですよ。

My Style

飛距離をキープするためにフルスイングを続ける。

加齢とともに飛距離が落ちてきたと感じているゴルファーは少なくない。直道選手は「フルスイングを忘れないことが大切」と語る。「思い切りスイングできない人も多いでしょうが、練習場で5球だけ120%で振ってください。がんばって振ることをしていないと、スイングは自然と弱くなるんです」。強く振るコツは「腕をゆったり使ってバックスイングをゆっくり上げ、フォローを大きくすること」。



テレビのプロゴルフ中継で表示される風向・風速データ

日本ユニシスは(一社)日本ゴルフツアー機構、(一社)日本女子プロゴルフ協会のスコアリングシステムを支援。当社のウインドスティックシステムで計測した風向・風速データをテレビ局に提供しています。